

早春

豊島与志雄

青空文庫

もともと、おれは北川さんとは何の縁故もない。街で偶然出逢っただけのことだ。

牛の煮込み……といつても、おもに豚の腸や胃や食道、特別には肝臓と心臓、そのこま切れを竹串にさして、鉄鍋でぐらぐら味噌煮にしたものだが、その鍋をかこんでアルコールを飲むという、この頃たいへんはやつている安直な飲み屋が、近くの街角に一つあった。

おれも時々鍋をつつつきに寄った。気むずかしそうな大人たちがいない場合は、コップ一、二杯飲むこともあった。そこで、初めて北川さんに逢った。帽子はかぶらず、マントにちび下駄の姿で、髪を短かめに刈った頭がへんに大きく見え、浅黒くて艶のわるい顔は善良そうだった。年は三十五六で、飲みっぷりがよかった。鍋の物はあまり食べず、焼酎……つまりアルコールの薄めたのを、二杯ほどあおって、あとは清酒のお燗したのをうまそうに飲んだ。飲みながら店の親爺と話をした。

「身投げのことを、絵や文章には、真逆様に飛びこむように書いてあるが、あれは嘘だよ。男でも女でも、逆様になんかなかなか飛びこみはしない。せいぜい横つ倒しで、たいていは立ったままの姿勢さ。水泳の飛び込みとは違うからね。やっぱり怖いんだな。或る時、寒い所で、女が身投げをしたことがあった。飛びこんだのが池で、氷がはりつめてたもん

だから、両足は水にはいつたが、大きな尻が氷につかえて、どうにも身動きが出来ず、もがいてるところを救いあげられた、という話があるよ。」

「へえー、ほんとですか。」

「ああ、実話だよ。」

そんな話をする彼を、おれは、文学者が画家かでもあろうと思った。——ところが違っていた。中学校の先生だった。もつとも、ちよつとした読物ぐらいは書いていたんだが。飲んでしまうと、御馳走さんと大きな声で言つて、出て行つた。

おれは親爺に聞いた。

「あの人、金を払わないね。」

「今日は持つていないらしいよ。またこんど、と小さい声で言つたらう。持つてる時に、いっしょに払うよ。」

「それはいいなあ。おれもそうしよう。」

「お前なんか、だめだ。あぶなくつてね。」

そんなことでおれはどうやら彼を好きになつたらしい。そして何度か出逢つてるうちに、彼のところに病人があつて生魚に不自由して困つてることを知り、時々生魚を届けてやる

ことにした。牛の煮込み屋から遠くない所で、静かな裏通りの古い小さな家だった。彼は……北川さんは、おれのような小僧つ子を信用して、五十円ぐらいつ先渡ししてくれた。その五十円も無い時があった。

「今日は金がないよ。二三日して来てくれ。」

それから二三日すると、ふしぎに金が出来ていた。もともと、おれの方でも、北川さんところでは、口銭はいつさい取らないことにしていたし、煮込み屋の親爺と同じように、掛売りの気前も見せてやった。

或る時、北川さんはおれに尋ねた。

「君は、本を読むことがあるかね。」

「そりやあ、僕だつて、ありますよ。」

「いや、本を読むのが好きかと言うんだよ。」

「好きですよ。」

そんならこれを読んでみると言つて、少年雑誌をおれにくれた。北川さんはへんに嬉しそうだった。道理で、雑誌には北川さんの名前のついている読物がのつていた。

おれには大して面白くもなかった。だが、その中のちよつとした話には、あとで思い当

ることがあった。これは大事なことで、北川さんの文章をそっくり写すといいんだが、雑誌をなくしてしまった。

話というのは、どこか山の温泉のことで、若い娘が一人、坂道の上に立っていた。坂道といつても、そこら全体が山腹で、はるか谷間まで草原の斜面なのだ。

——その遠い低いところ、草原のはてに、一つぽつりと、黒いものが見えた。何だろうかと、娘はそれを見つめた。黒い一点は、動いていた。だんだんこちらに近づいてくるらしい。たいへんな速さで、こちらへやってくるらしい。次第に大きくなった。馬だった。人が乗っていた。馬も人も黒く見えた。それが、たいへんな勢いで、たいへんな速さで、草原を駆け登ってきた。ますます近づいてくる。ますます大きくなる。下方の谷間を流るる川や、そのあたりの畑地や、杉の木立など、パノラマのような美しい背景のなかに、人が大きく浮きだして、それが草原をいっさんに駆け登ってくる。五百メートル、三百メートル……あ、もうすぐ目近に来了。怪物のように大きくなった。それがまっ黒で、機関車のように突進して来た。ぶつつかった……と思ったとたん、娘は地面に倒れたが、馬はまるで影か霧のように、すーっと通りすぎていった。

こんな話、おれには何のことかよく分らなかつた。お伽話でもないし、お化け話でもない

いし、いささかばからしくも思えた。北川さんもその当座、おれの批評など求めはしなかった。——それが、実は、病人の頭から醸し出されたものだったんだ。

北川さんはまだ独身で、家庭には、年とつた母と若い妹がいた。病人というのは妹のことで、その姿をおれが見たのは事件が起つてからのことだ。

おれはただ生魚を時々持つていった。おれは魚屋じゃない。戦災で親たちが田舎へ引き込んだあと、一人東京に残つて、まあ謂わば植木屋の手伝いみたいなことをしていた。忙しい仕事もめつたにないし、あちこちに手蔓があるものだから、物品の仲立ちも少しはやつた。大人でなくて小僧つ子なもんだから、却つて便利がられた。けちな仕事だが、金は相当にもうかつた。

ところで北川さん……はつきり言えば北川辰治は、ちよつと文学者めいたところのある人だが、それでいて少しも氣むずかしくはなく、至極のんびりしていた。どうして中学校の先生なんかしているのか分らなかつたが、外になにもすることがなかつたからだろう。貧乏なのか金持ちなのか見当がつかなかつた。十円札一枚もないこともあれば、新らしい百円札をたくさん持つてゐることもあつた。

おれが識り合つたのは一月の半ばで、それからずっと寒い日が続いた。梅の花の咲くの

が後れた。そして三月になった或る日のこと、へんなことが起つた。春先のせいかな。

おれはいつものように、生魚を少し北川さんへ届けた。裏口からはいつて、台所へ声をかけたが、返事がない。なんども呼んでいると、庭の方から北川さんがやって来た。作業服みたいな姿で、地下足袋をはいている。

「ああ、君か。よく来たね。」

おかしな挨拶だが、その訳はすぐに分つた。北川さんは魚をしまつてから言つた。

「今、君は暇かい。」

「なんか用ですか。」

「よかつたら、ちよつと手伝つて貰いたいんだが……。」

梅の木を植える手伝いだつた。物置小屋を廻つてゆくと、鍵の手になつてゐる建物が、わりに広い庭をかかえている。庭師の手にかけた庭ではないが、百日紅や野薔薇や八手や檜葉や椿などが、広場の向うを限つている。その片端のところ、穴が掘りかけてあり、大きな梅の木が塀に立てかけてあつた。背は低いが、手入れの届いたみごと古木で、散り残つた花がまだ少し残つており、根廻りを大きく取つてあつて、北川さん一人ではとても扱えそうになかつた。そこへ持ち込むにも、板塀を越させたんだろう。

「いい木ほくですねえ。どうしたんです。」

「貰もらい物なんだ。」

茶の間とおぼしい方の縁側に、まだ学生でもあろうかと思える青年が腰掛けていた。頭髪を長く伸ばし、ホームスパンの背広を着こんだ、顔の蒼白い好男子だった。

北川さんは鋤を探しに、おれまで物置小屋へ引っぱってゆき、声をひそめて手短かに話した。

「実は、弱よってるんだよ。」

——あの青年は、竹中貞夫といって、知らない間柄ではない。彼から頼まれたというこ
とで、一昨日、運搬屋が梅の木を持ちこんできた。そして昨日、彼自身やって来た。北川
さんの妹の梅子に、梅の木を贈る約束をしたから、それを果すんだと言う。梅子に聞けば、
そんな約束は覚えがないと言う。それでも竹中は約束したと言ひ張り、あの木を庭に植え
るまでは帰らないと、腰を落着けてしまった。とうとう昨夜は泊りこんだ。今朝になると、
早く梅の木を植えようと催促する。父や母も来ることになってるから、あの木がここに植
えられたのを見たら、喜ぶだろうと言う。ほんとに両親とも来ることになってると言う。

「そんな筈はない。」と北川さんは言った。「少し気がへんじやないかと思うよ。」

おれには話がよく分らなかつた。もつと詳しい關係を聞いてみた。

——竹中のうちは資産家で、昔、北川さんの父がたいへん世話になったことがある。そのこの、老夫人が体が弱く、人手も足りないもので、暫くの間、梅子が手伝いに行っていた。小間使というところか。そして昨年秋、夫人は梅子を連れて、伊豆の湯ヶ島にちよつと保養に出かけた。そのの旅館の主人と懇意なのだ。すると、あとから貞夫がやって来た。貞夫は馬が好きで、近くに乗馬を一頭見つけだし、天城山麓を乗り廻した。或る日、その馬が狂奔した。低空を飛んでた飛行機に驚いたのか、走り去つた数台のトラックに慍えたのか、道を横切つた鼯に化かされたのか、とにかく、つっ走つた。道の真中で貞夫を待つてた梅子は、貞夫が馬を駆けさせてるのだとばかり思つた。目近になつて、貞夫の様子に気がつき、慌てて避けようとして転んだ。手をすりむいただけですんだ。馬は飛び越して行つた。だが、貞夫は落馬して、さらに崖から落ち、かなりの傷を負つた。

そういうことで、おれは北川さんの書いた話を思い浮かべた。

——湯ヶ島から帰つても、貞夫は気分がすぐれず、時々病院に通つていた。そのうち、梅子が病氣になつて、自家へ戻つてきた。気管支肺炎から肋膜炎までわるくし、高熱を出した。だが幸に、もう殆んどなおりかけている。貞夫から何度か手紙が来たようだった。然

し、二人の間に恋愛関係はないらしく、あつても大したものではあるまい。

「それだけのことだ。」と北川さんは話を打ち切った。

「それでまあ、梅の木は植えることにしたよ。樹木は大切にしていやらなければならんからね。」

「妹さんと仲がいいんですか。」とおれは聞いてみた。

「誰と……。」

「その竹中さんですよ。」

「あまり口数は利かず、静かに対応していた。そうして梅子と話してる時は、少しも変わったところは見えないがね。」

「ほんとにいくらかふれてるんですか。」

「それがどうも、確かには分らない。君もちよつと探ってみてくれよ。まだ若いが、君には、民衆の智慧があるだろう。つまり、健全な常識がある筈だ。」

おれは物置小屋の外におり、北川さんは小屋の中にひっこんで、話をしていた。そしておれはへんな気がした。北川さんも少しどうかしてるんじゃないかと思った。

「とにかく、仕事を片付けましょうよ。」

「そうだ、そうだ。」

北川さんは鋤を探しだして来た。おれたちは仕事にかかった。

庭の土は思ったより柔かで、たやすく穴が掘れた。それへ梅の木を据えこむ段になって、竹中さんも立ち上つて来て、加勢をした。梅の木の向きについて、うるさくいろいろなことを言った。それが一々もつともなのが、素人にしては、ふしぎだ。植付けを終えると、梅の木はそこにみごとな枝ぶりを示した。太枝に花が少し残ってるのだけが、却つてぶざまだった。

木を眺めながら、縁側に腰かけて茶を飲んでいると、竹中さんはじつとおれの方を見つめた。いつまでも見つめている。そして言った。

「君は誰ですか。」

丁寧な口の利き方だ。おれがためらっていると、北川さんが答えた。

「僕の従弟ですよ。」

「従弟さんですか。初めてですね。」

おれの方で冷りとした。ジャンパーにゴム靴なんかの姿が顧みられた。だが、彼はもう北川さんと話しだした。

「あの枝は切った方がいいですね。」

「どれですか。」

「あの、こちらへ伸び出してるやつ……。」

「そう。ちと邪魔ですね。だが、若い枝のようだから、実はなるでしょうよ。」

そこで、梅はいつたい花の方が大切か実の方が大切かという話になって、禅問答のようなことが続いた。

「僕はたくさん実のなる梅が好きですね。」と北川さんは言った。

「僕はたくさん花の咲くのが好きですね。」と竹中さんは言った。

それは議論じゃなくて、別々のことを勝手に言ってるような調子だった。どちらも、相手の言うことなんかまるで気にもとめず、独語をしてるみたいだ。側で聞いていると、おれはおかしかった。気がへんだとすれば、二人ともそうではないかと思われた。

そのうちに、お母さんが帰って来た。北川さんは物蔭でお母さんとなにか話し合った。そこで、おれは帰ってゆこうとしたが、北川さんから呼びとめられた。

「ちよっと、使いをしてくれないかね。」

北川さんは紙幣をおれに渡して、牛の煮込み屋から酒を一升ほど買ってきてくれと言っ

た。ついでに、二百円ほど借りがあから払ってくれと言った。

「母が金を拵えてきてくれたから、助かったよ。」

北川さんは嬉しそうに笑った。

「借りてきたんですか。」とおれは思わず言ってしまった。

北川さんはおれの顔をじつと見て、それから、さも重大な秘密でも洩らすように囁いた。——小さな貸家を一ツ持っていたが、それを、親戚に頼んで、買って貰った。十万円になった。但し、借家人がはいっているのです、それが立退いて空け渡しするまでは、月々三千元ずつ貰うことになっている……。

それで、北川さんの暮し向きのことがおれにも分ったが、ちよつと淋しかった。そんな売り食いの仕方は自慢になるもんじやない。だが、北川さんは自慢そうな笑顔をしているんだ。

おれが眉根をしかめてみると、北川さんは何を勘違いしたか、おれの肩を一つ叩いて言った。

「とにかく、梅の木を持って来てくれたんだから、酒でも出さなくちやなるまい。それに、両親が来るというから、そうなったら、ちと大変だ。米も足りないし、御馳走はなにもな

いし……ひとつ奔走してくれよ。」

言うことは道理だが、考えの根本がどうもおかしい。竹中さんにかぶれたのかも知れない。

「万事引き受けますよ。」

安心さしておいて、おれはまず、牛の煮込み屋の用だけは果してやった。だが、それだけで逃げるわけにもゆかない。なんだか気の毒だ。度が少し曲りかけてるお母さんを手伝って、台所の用をしてやった。

ささやかな酒宴がはじまった。竹中さんもいけるたちらしい。酒がまわるにつれて、妙な話題が出てきた。おれは台所の用をすまして、縁側に置いてある電熱器で、手製の煎餅をやりながら聞いていた。

——世の中は隙間だらけだというのだ。原子とか分子とかいうものにも、隙間がある。そういうもので出来てる物質も、隙間だらけだ。——天井にも床にも、壁にも、隙間がある。扉にも隙間がある。——人の注意にも、隙間がある。心にも隙間がある。——だから、そういう隙間をねらえば、どんなことだって出来る。大きな木だって持ち出せる。人間だって持ち出せる。

まあこんな風な、何もかもごつちやにした話だが、中心はどうやら、あの梅の木にあるらしかった。あれは竹中さんの庭にでも植わってたもので、それをひそかに持ち出す興味と苦心とが、面白かったのだろう。——そんなことを問題にしている竹中さんは、たしかに気が少しへんだ。話にのつてる北川さんも、謂わば共犯者で、ちっとおかしい。

然しその話は、終りまで続かなかつた。玄関に人が来て、お母さんは暫く話をし、それから、玄関と茶の間との間を往復して、その人を茶の間に通した。

竹中家のいろんな用をしてる番頭格の、山口という人だった。痩せた小柄な中年者で、禿げあがった額の下に、小さな眼が鋭く光っていた。一目見た時からおれはこの人が嫌いになった。山口さんなどとはどうしても言えない。山口と呼び捨てにするより外はない。

山口は一座に会釈をして、言った。

「これは、お邪魔を致します。わたくしはただ、貞夫さんだけにお目にかかれれば宜しいので、外に用はございません。」

最初から角のある言い方だ。おれはどきりとした。だが不思議だった。当の竹中さんも、北川さんも、黙りこんただけで、平気な顔をしている。

山口は竹中さんの方を向いて、ずばりと言った。

「あなたをお迎えにあがったんですが、お帰りなさいませうね。」

「ああ帰るよ。」

おれにまで丁寧な竹中さんとしては、これはまた至極ぞんざいだ。山口は大きく頷いた。「それで安心致しました。御両親もたいそう心配しておられますし、これから……。」

「あ、お父さんとお母さんは、いつみえるかね。」

山口は小さな眼をしばたいた。

「こちらへ来られることになつていたが……。」

「とんでもないことを仰言います。わたくしが代理でお迎えにあがったんでございますよ。」

両親が来るというような竹中さんの言葉は、山口の憤慨を爆発させたらしい。彼は俄にまくし立てた。言い廻しは丁寧だが語調は荒かった。——昨日から貞夫が帰らないので、家の者は心配していた。貞夫はまだ充分に病気がなおつてもいないし、物騒な時節柄だ。気をもんでいると、一昨日、庭の梅の古木を、植木屋が掘り返して、どこかへ運んだことが分つた。それが貞夫の指図だ。植木屋をつきとめて、こちらだという見当がついた。それで、迎えに来た。いったい、どういう量見だったのか。梅の木の本や、二本、惜しく

はないが、なんで泥坊みたいな真似をするのか。誰かにそのかさされたのか。来てみると、しゃあしやあと酒なんか飲んでいゝ。茶屋小屋ならまだしも、ここがどういう家か、よく考えてみたら分る筈だ。もと邸にいた娘の病氣見舞いなら、見舞いのような方法もあろう。こちらだつて迷惑だろう。近所に電話がないわけではあるまいし、泊まるなら泊まると、邸に電話でもするのが当り前なのを、いつまでも引き留めて酒のもてなしをするなど、以ての外だと、非難されても仕方がなく、そういう迷惑をこちらにかけては済むまい……。

山口は竹中さんに向つてだけ話したのだが、次第に、北川さんへのあてつけが多くなつた。直接に北川さんへは口を利くまいと決心してゐるようだ。その全体が、特別な話し方で、真綿に針を包んでゐる。

北川さんと竹中さんは、黙りこんだまま、知らん顔をして、煙草をふかし酒を飲んでゐた。お母さんは奥の室の病人の方へ行つた。おれはいらいらしてきた。煎餅をこがした。

庭にはもう夕陽が薄らぎかけていた。山口はそちらへ眼をやつて、梅の木を見付けた。「ほう、梅はやはりこちらへ来てゐるようすなあ。」

山口は無遠慮に立つて来て、縁側の硝子戸を大きく開けて、庭を眺めた。

その時、これもやはり隙間なのか、竹中さんは北川さんに小声で言った。

「お邪魔しました。これで失礼します。」

お辞儀をする途すぐ、竹中さんは立ち上つて、実にす早く、廊下へ出てしまった。山口が振り向きかけたとたんに、おれは言った。

「寒いなあ。」

大きく開けてある硝子戸を、力一杯にぶつつけてやった。真鍮のレールで滑りがよかつた。その戸をまともに受けて、山口はよろけ、縁外に飛び落ちた。

「乱暴な……。」

山口はおれの方を見たが、おれはそっぽを向いていた。彼は何と思つたか、それきりで、額と腰をさすり、縁にはい上つて、足袋底の泥を丁寧にくすり落した。それから席に戻つて、室の中を見廻した。誰も口を利かなかつた。

玄関の方に竹中さんとお母さんの声があった。山口は出て行つた。竹中さんはもう帰りかけていた。

二人を送り出して、お母さんは茶の間に来た。

「おかしな人ですよ。つかつかとはいって来て、梅子の枕もとに坐つて、早くおなおりな

さい、きつとなおります、そう言つて、両手をついてお辞儀をしました。可哀そうに、梅子が、ほろりと涙をこぼしたときには、もう室から出て行きかけていました。どういふんでしようねえ。」

お母さんは立つたまま話したが、それきりで、病人の方へ行つた。

北川さんは黙りこんで酒を飲んだ。そしておれにもすすめたので、遠慮なくおれも飲んでやつた。

北川さんがへんに考えこんでるので、おれは氣を利かせて、やがて出て行つた。北川さんとなにか話したいことがあるようだったが、それも諦めて、忘れた。

それでも、やはり氣になつて、翌朝、行つてみた。

台所で、お母さんが食事の仕度をしていた。おれは梅の木を見に行つた。朝日がいつぱいさしてゐるあちらの縁側の、硝子戸の中に、北川さんと妹さんが何か話していた。

おれは梅の木を見上げた。いろいろな思いが絡んでるので、身内のような気がした。

北川さんが硝子戸をあけて、おれを呼んだ。

「よく来たね。」

昨日と同じ挨拶だ。はればれとした顔をしていた。

だが、それよりも、おれはびっくりした。梅子さんがとても美しかった。近くで見たのは、いや、ほんとに逢ったのは、初めてだ。梅子さんは日向にひきずりだした布団の上に、脇息にもたれて坐っていた。髪はおさげにして編んでいる。纏袍にくるまった体はひどく細そりしている。ほんの少女という恰好だ。でも顔は一人前の女で、朝日の光りを受けてるせい、肌が透き通つてるように見える。眼が黒々として底が分らない。下頬にぽつりと肉のふくらみがあつて、小さな受け口だ。その全体がおれにはびっくりするほど美しく思われた。兄さんには殆んど似ていない。しいて探せば、額と耳が似てるぐらいだろう。

おれがびっくりして梅子さんを見ると、北川さんは言った。

「梅子は、君を医者よりも頼りにしてるよ。薬より魚の方が好きだからね。」

おれは顔が赤くなるのを感じた。

「ほんとに、いつも有難いと思つていますの。」

そう言つて、梅子さんは黒々とした眼でじつとおれを見た。おれはへんに口が利けないで、眼を伏せた。

「その代り、お前の、童話を読ませてやったよ。」と北川さんは言った。「そら、お前が

考えて、僕が書いたやつさ。」

梅子さんはただ笑っていた。

おれはそこにほかのように突っ立つてるのがつらくなって、お辞儀をして去ろうとした。すると、北川さんから呼びとめられた。

「実は、君にまた頼みたいことがあるんだがね。」

「ええ、なんでもしますよ。」

「おかしなことだが、あの梅の木なんだ。」

北川さんは暫く口を噤んだ。

「あれを君にあげるから、いいように始末してくれないかね。薪なんかにしてしまうのは可哀そうだから、どこかに植えて、やはり生かしといて貰いたいんだ。とにかく、あれをまた掘り起して、ほかへ移すんだ。費用は出すから、頼むよ。」

「あすこに置いといては、いけないんですか。」

「折角のものだから、貰い受けるつもりだったが、あんなことがあつては……。あの嫌な奴さ、あんな奴に汚されては、僕はもう嫌になった。話をすると、梅子も嫌だと言う。どこか遠くへ持って行ってくれよ。」

おれは首垂れてしまった。初めは意外だったが、その意外が意外でなくなり、北川さんや梅子さんの気持ち、おれの中にもはつきり伝わってきた。

「分りました。」

おれはそれだけ言つて、くるりと向きを変え、梅の木を眺める風をした。そして眼を手の甲でこすつた。涙が出てきてこらえきれなかった。

なんで悲しいのか、おれにもよく分らなかつたが、胸がつまって涙が出るんだ。梅子さんがあまり美しかったからだろうか。春先の感傷のせいだろうか。

おれはそこらを歩きまわつて涙をごまかした。それから、梅の木はおれが貰つてやろうときめた。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第四卷（小説4【#「4」はローマ数字、1-13-24】）」未来社

1965（昭和40）年6月25日第1刷発行

初出：「苦楽」

1947（昭和22）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年1月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

早春

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>